

# 雪嶺集

〈宮坂静生 鑑〉



わたつみ

小林 貴子

強風の萩叢まるで鏡獅子  
河童忌の河童は木曾に遊びをり  
顔に灯及ばぬ木曾踊  
避暑少女沈める時は声細く  
わたつみのいろこの宮や終戦日  
白桃や歌ふ如くに降る日差  
子蠟螂風に吹かれて離散かな  
古墳丘ぽこぼこ連ね七月来  
箱眼鏡眉のあたりに杵が来る  
灯取虫世襲の独裁を思へ

ジュラ紀恋ふ

佐藤 映二

鉄砲百合の気焰むんむん燈台へ  
みんなの割れ鐘ごゑを待みとす  
蛇苺テロの温床絶やせず  
こんぶくろ池の谷蠨ジュラ紀恋ふ  
噴水や坐して読み継ぐ種の起源  
サイダーの壘の彼方に賢治笑む

四季と折り合つ

童話の虫森にあつめて賢治祭

佐藤 映二

(照井ちうじ句集『向日葵』所収)

九月二十一日は宮沢賢治の命日で、花巻の「雨ニモマケズ」碑の前で催される賢治祭には全国から大勢の人が集う。ちうじの本名は忠治。宮沢家の遠縁にあたり、賢治の弟清六が経営する電気製品金物商に出征時まで勤めた。敗戦と同時によ連の俘虜となる運命だったところ、汽車から飛び降り

て命からがら逃走、衛生兵として磨いた料理の腕を現地の中  
華料理店主に見込まれ、そこにしばらく身を置いたあと、引  
揚船で帰還したという。

戦後は地元の金属加工会社で働く一方、昭和三十七年、  
「夏草」(山口青邨主宰)に入会する。四十四年、夏草新人賞  
受賞、五十一年同人に。そのかたわら、戦前に習得していた  
アコーディオンやハーモニカで、音楽好きの宮沢一家を愉  
しませたとのことである。

セロ弾いてゴージュが野より蝶を呼ぶ ちうじ